

## 「ヨハネからイエシュアへ」

ルカの福音書 3:16~38

### はじめに

では今日も聖書に隠された神のご計画にのみ目をとめてまいりましょう。聖霊の助けがありますように。

### 1. 水のバプテスマ

ルカの福音書【新改訳 2017】

3:16 そこでヨハネは皆に向かって言った。「私は水であなたがたにバプテスマを授けています。しかし、私よりも力のある方が来られます。私はその方の履き物のひもを解く資格もありません。その方は聖霊と火で、あなたがたにバプテスマを授けられます。」

前々回、また前回も述べましたが「バプテスマ」とは、ヘブル語でターヴァルと言い、それは血に浸した衣、それをまとして地上再臨されるメシア、神の御子イエシュアを指し示すものです。私たちはその日本語訳である「洗礼（式）」によって救われるわけではありません。再臨されるイエシュアによって救われるのです。そしてそもそも救いとは、単に罪が赦されるというだけのものではなく、イエシュアがこの地上に建て、治められるメシア王国、千年王国とも呼ばれる「御国、神の国」の、その民としてそこに住まうようになることを指すのです。それが、それこそが、ただそれだけが私たちに与えられる救いの、その具体的な現れ、完成です。ですから「バプテスマ」とはつまり、イエシュアの再臨の「型」なのです。

ここでヨハネは自分よりも「力のある方が来られ」その御方は「聖霊と火」でバプテスマを授ける御方であるとしてイエシュアを紹介していますが、自分自身は「水」でそれを行っていると言っています。ですからヨハネのバプテスマとイエシュアのそれは明らかに異なるものであり、つまり異なる「再臨」を表していると言えます。それはすなわちヨハネの「水」のバプテスマとは、教会の携拳とも呼ばれるイエシュアの空中再臨を指し示したものであり、そしてイエシュアの「聖霊と火」によるそれは、イスラエルの王なるメシアとしてのイエシュアの地上再臨を指し示したものであるということです。ヨハネの「水」が携拳を指し示す根拠となるのが以下の御言葉です。

創世記【新改訳 2017】

1:6 神は仰せられた。「大空よ、水の真ただ中であれ。水と水の間を分けるものとなれ。」

1:7 神は大空を造り、大空の下にある水と大空の上にある水を分けられた。すると、そのようになった。

1:8 神は大空を天と名づけられた。夕があり、朝があった。第二日。

このように「水」とは本来、天の下と「上に…分けられ」る、つまりそれまで下にあったものの一部が分けられ、上に引き上げられるものであることがわかります。イエシュアの空中再臨による携拳とはまさにそのような出来事です。こう預言されているとおりです。

I テサロニケ人への手紙【新改訳 2017】

4:16 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、

4:17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

イエシュアの地上再臨のその前に起こる、空中再臨による携挙、それがヨハネが行った「水」のバプテスマには指し示されているのです。

## 2. 聖霊と火のバプテスマ

ヨハネが語ったイエシュアによる「聖霊と火」によるバプテスマ、これを使徒の働き 2:1~4 の出来事と結びつける解釈があります。

使徒の働き【新改訳 2017】

2:1 五旬節の日になって、皆が同じ場所に集まっていた。

2:2 すると天から突然、激しい風が吹いて来たような響きが起こり、彼らが座っていた家全体に響き渡った。

2:3 また、炎のような舌が分かれて現れ、一人ひとりの上にとどまった。

2:4 すると皆が聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、他国のいろいろなことばで話し始めた。

この出来事から「聖霊と火」によるバプテスマとは私たち教会、クリスチャンの始まりを表していると考えられる人がいます。しかしそれでは次の「また手に箕を持って、ご自分の脱穀場を隅々まで掃ききよめ、麦を集めて倉に納められます。そして、殻を消えない火で焼き尽くされます。」というヨハネのたとえに結びつかず、その意味もはっきりしないものになってしまいます。聖書は常に前後の文章同志が互いにその意味を補い合うようにして記されているのです。だとするならば、「聖霊と火」のバプテスマとは、上記の出来事を指し示すものではありません。たとえもしそうであったとしても、それもまた「型」であり、究極的な事実ではありません。神は常に聖書を通して終わりについて、最終的な出来事、ご計画の完成を指し示しておられるのです。確かに上記の出来事は、旧約の時代の人々にとっては未来でも、今日の私たちにとってはもはや過ぎ去った昔の出来事です。述べたようにこの「聖霊と火」のバプテスマとはイエシュアの地上再臨を指し示すものです。こう預言されているとおりです。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

19:11 また私は、天が開かれているのを見た。すると見よ、白い馬がいた。それに乗っている方は「確かで真実な方」と呼ばれ、義をもってさばき、戦いをされる。

19:12 その目は燃える炎のようであり、その頭には多くの王冠があり、ご自分のほかはだれも知らない名が記されていた。

19:13 その方は血に染まった衣をまとい、その名は「神のことば」と呼ばれていた。

19:15 この方の口からは、諸国の民を打つために鋭い剣が出ていた。

地上再臨される際のイエシュアはこのように描写されています。その目は「燃える炎」、口からは「鋭い剣」とあります。剣は御霊、聖霊の「型」たとえばです。エペソ人の手紙 6:17 で使徒パウロも御霊をそのように表現しています。つまりこの預言を指し示しているのが、ヨハネが語ったイエシュアの「聖霊と火」によるバプテスマの究極的な意味です。そのように考えるならば、次のヨハネのたとえが具体的な事実を指し示していることが見えてきます。

ルカの福音書【新改訳 2017】

3:17 また手に箕を持って、ご自分の脱穀場を隅々まで掃ききよめ、麦を集めて倉に納められます。そして、穀を消えない火で焼き尽くされます。」

3:18 このようにヨハネは、ほかにも多くのことを勧めながら、人々に福音を伝えた。

地上再臨されるイエシュアはまず「ご自分の脱穀場を隅々まで掃ききよめ」られます。この「脱穀場」は旧約聖書では「打ち場」と訳されています。ではその「打ち場」とは何でしょう。以下の記述を見てください。

Ⅱ 歴代誌【新改訳 2017】

3:1 ソロモンは、エルサレムのモリヤの山で【主】の宮の建築を始めた。そこは、主が父ダビデにご自分を現され、ダビデが準備していた場所で、エブス人オルナンの打ち場があったところである。

このように、「ご自分の脱穀場」「打ち場」とはすなわち「エルサレムの…【主】の宮」エルサレム神殿を指し示したものです。地上再臨されるイエシュアはこれをきよめられます。なぜならその時そこは終わりの日に現れる獣、反キリストによって甚だしく汚され、獣の像を拝む場所、墮落、背教の家となり果てているからです。ですからこれを獣の手から奪い、「ご自分の脱穀場」すなわちご自分の宮、神殿としてきよめられることがここには指し示されているのです。そして「麦を集めて倉に納められます」とは、イエシュアがご自分の民であるイスラエルの残りの者たちを集められるということであり、また「穀を消えない火で焼き尽くされます」とは反キリストをゲヘナ、火の池に投げ込まれるということです。筆者ルカは「ヨハネは、ほかにも多くのことを」語ったとしながらも、それらの中から厳選してこのたとえを記し、これを「福音」としています。今日の教会がよく宣べ伝えている福音、すなわちイエスキリストの十字架の死と復活、祝福されたクリスチャンライフという名の福音と、ここでヨハネが語り、そしてルカが厳選して書き記したそれとは、大きなズレ、相違があることをぜひ覚えていただきたいのです。

ルカの福音書【新改訳 2017】

3:19 しかし領主ヘロデは、兄弟の妻ヘロディアのここと、自分が行った悪事のすべてをヨハネに非難されたので、

3:20 すべての悪事にもう一つ悪事を加え、ヨハネを牢に閉じ込めた。

上記の出来事は、一見ヘロデの悪事による、ヨハネの悲しい結末という事実のみを記したものとわれがちですが、先ほども述べたように、聖書は前後の文章が互いにその意味するところを補い合って記され

ていると考えるならば、これもまた「福音」となります。先ほどのたとえの意味を思い出してください。それは再臨のイエシュアがご自分の神殿と民を獣から奪い返し、獣を火の池に投げ込むというものでした。ではここでヘロデが行ったことを見てください。彼はヘロディアを奪って自分の妻とし、ヨハネを投獄したのです。どうですか、ヘロデは悪者、ヨハネは正しいという偏見を除けば、ここに記されている出来事は前のたとえのおさらい、繰り返しによる強調であると読み取ることができるのです。ちなみにヘロデ(סורודוס)はヘブル語で表記するとこのようになり、するとそこに「(神が) 降りて来る(創 11:5)」という意味のヤーラド(רָאָד)という言葉を見つけることができるのです。つまりここでのヘロデは先にも表された地上再臨、まさに天からヤーラド、降りて来られる神、イエシュアの「型」だということです。イエシュアは獣の支配にあえぐイスラエルの民を、獣から奪い、ご自分の民とされ、それを「非難」する、敵対する獣を火の池に投げ込まれ「閉じ込め」られます。このように、おそらく筆者ルカは意図せずとも、聖霊は終わりの日の神のご計画としてのその「福音」の「型」たとえをここに二度繰り返し、これを強調しておられるということをご存知いただきたいのです。

### 3. 天が開け

ルカの福音書【新改訳 2017】

3:21 さて、民がみなバプテスマを受けていたころ、イエスもバプテスマを受けられた。そして祈っておられると、天が開け、

ここには民とイエシュアがともにバプテスマを受けている様子が描かれており、そこで「天が開け」たとあります。この出来事は以下の預言を指し示す「型」です。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

19:11 また私は、天が開かれているのを見た。すると見よ、白い馬がいた。それに乗っている方は「確か  
で真実な方」と呼ばれ、義をもってさばき、戦いをされる。

19:13 その方は血に染まった衣をまとい、その名は「神のことば」と呼ばれていた。

19:14 天の軍勢は白くきよい亜麻布を着て、白い馬に乗って彼に従っていた。

バプテスマとは本来、衣を血に「浸す」という意味であり、地上再臨されるイエシュアの御姿「血に染まった衣」を指し示すものですが、それはまた同時にそのイエシュアにつき従って来る「天の軍勢」をも指し示しています。なぜなら彼らの着ている「白くきよい亜麻布」は以下のようにして作られたものだからです。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

7:13 すると、長老の一人が私に話しかけて、「この白い衣を身にまとった人たちはだれですか。どこから来たのですか」と言った。

7:14 そこで私が「私の主よ、あなたこそご存じです」と言うと、長老は私に言った。「この人たちは大きな患難を経てきた者たちで、その衣を洗い、子羊の血で白くしたのです。

このように、バプテスマとは地上再臨されるイエシュアと、それにつき従って来る天の軍勢と呼ばれる聖徒たちをも指し示すものなのです。つまり私たちが受けた洗礼とは、やがて私もイエシュアとともにこの地上に帰って来る、聖徒の一人として天から降りて来る、ということを表したもののなのです。ここには大前提として先のイエシュアの空中再臨によって携挙されていることが必須となってきます。私は1989年に洗礼を受けましたが、その当時は洗礼にそのような意味があるなどこれっぽっちも思ってはいませんでした。それどころか、洗礼を受けたら何か良いことがある、賢くなれる、強くなれるかもしれない、というような考えしかありませんでした。しかし33年経った今、こうしてバプテスマの真の意味が開かれたことを主に感謝しています。

#### 4. さばきを行う

ルカの福音書【新改訳2017】

3:22 聖霊が鳩のような形をして、イエスの上に降って来られた。すると、天から声がした。「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ。」

そして上記の出来事は以下の預言を指し示しています。

イザヤ書【新改訳2017】

42:1 「見よ。わたしが支えるわたしのしもべ、わたしの心が喜ぶ、わたしの選んだ者。わたしは彼の上  
にわたしの霊を授け、彼は国々にさばきを行う。

この預言との結びつきから、イエシュアの再臨の目的、それは「国々にさばきを行う」ためであることがわかります。つまり救うべき者を救い、滅ぶべき者を滅ぼすということです。そして王の王、主の主として、この地を統べ治められるということでもあります。しかしそれは今の世においてではありません。聖霊が「鳩のような形をして」いたことにその意味が隠されています。この「鳩」という生き物が、聖書で最初に登場した出来事、それは創世記7章にあるノアの箱舟の物語で、この「鳩」は大洪水による滅びが過ぎ去り、新しい地上、新しい時代の始まりを指し示す存在として登場します。地上再臨されるイエシュアが統べ治められる「神の国」とは、今の世、今の時代が滅び、過ぎ去って後に、天ではなくこの地上に建てられるものであることがここには示されているのです。

ルカの福音書【新改訳2017】

3:23 イエスは、働きを始められたとき、およそ三十歳で、ヨセフの子と考えられていた。

またイエシュアは「三十歳」でその働きに入られたともありますが、これもまたイエシュアが地を統べ治められる御方であることを指し示しています。

創世記【新改訳2017】

41:40 おまえが私の家を治めるがよい。私の民はみな、おまえの命令に従うであろう。私がまさっているのは王位だけだ。」

41:41 ファラオはさらにヨセフに言った。「さあ、私はおまえにエジプト全土を支配させよう。」

41:44 ファラオはヨセフに言った。「私はファラオだ。しかし、おまえの許しなくしては、エジプトの国中で、だれも何もすることができない。」

41:46 エジプトの王ファラオに仕えるようになったとき、ヨセフは三十歳であった。ヨセフはファラオのもとから出発して、エジプト全土を巡った。

## II サムエル記【新改訳 2017】

5:4 ダビデは三十歳で王となり、四十年間、王であった。

アブラハムの子イサクの子イスラエルの子ヨセフ、彼は「三十歳」でエジプトを支配したとあります。またイスラエルの王ダビデも同じく「三十歳」でその王位に着きました。ですからここにはイエシュアがイスラエルの王にして異邦の国々の王、まさに王の王、主の主であることが表されているのです。

## 5. ( ) の民

### ルカの福音書【新改訳 2017】

3:23 **イエス**は、働きを始められたとき、およそ三十歳で、ヨセフの子と考えられていた。ヨセフはエリの子で、さかのぼると、

3:24~38 マタテ、レビ、メルキ、ヤンナイ、ヨセフ、マタティア、アモス、ナホム、エスリ、ナガイ、マハテ、マタティア、シメイ、ヨセク、ヨダ、ヨハナン、レサ、ゼルバベル、シェアルティエル、ネリ、メルキ、アディ、コサム、エルマダム、エル、ヨシュア、エリエゼル、ヨリム、マタテ、レビ、シメオン、ユダ、ヨセフ、ヨナム、エルヤキム、メレア、メンナ、マタタ、ナタン、ダビデ、エッサイ、オベデ、ボアズ、サラ、ナフション、アミナダブ、アデミン、アルニ、ヘツロン、ペレツ、ユダ、ヤコブ、イサク、アブラハム、テラ、ナホル、セルグ、レウ、ペレグ、エベル、シェラ、ケナン、アルパクシャデ、セム、ノア、レメク、メトシェラ、エノク、ヤレデ、マハラルエル、ケナン、エノシュ、セツ、**アダム**、そして神に至る。

ここには系図としてたくさんの方が連ねられていますが、系図とは、血統とも呼ばれる同じ血を受け継いだ同族、血を分けた兄弟、家族を意味するものです。つまりここに表されているものは「**神に至る**」家族、神の民、神の国のその国民です。たとえどれだけ素晴らしい王がいても、その王を王と呼び、従う民がいなければ国は成り立ちません。ではみなさん、ここに記されたイエシュアからアダムまでの名前を数えてみてください。

するとここには ( ) の名があることがわかります。そしてそれは ( ) と ( ) という二つの数が合わさったものであることがわかります。それぞれの数が指し示す存在を表した御言葉は以下のものです。

## 創世記【新改訳 2017】

46:27 エジプトに来た**ヤコブの家族**は、全部で ( ) 人であった。

申命記【新改訳 2017】

10:22 あなたの父祖たちは（ ）人でエジプトへ下ったが、今や、あなたの神、【主】はあなたを空の星のように多くされた。

これはアブラハムの子イサクの子ヤコブすなわちイスラエルとその家族が、故郷の地を離れ、エジプトに移ったこと、つまりイスラエルの民が異邦人とともに住み、異邦人とともに生きたという事実を示すものであり、そこに（ ）という人数が記されています。つまり（ ）とは異邦人とともに住みともに生きるイスラエルの民の存在を表す数だということです。

では残りの（ ）とは何でしょう。以下の御言葉、預言にあるとおりです。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

1:19 それゆえ、あなたが見たこと、今あること、この後起ころうとしていることを書き記せ。

1:20 あなたがわたしの右手に見た（ ）つの星と、（ ）つの金の燭台の、秘められた意味について。（ ）つの星は（ ）つの教会の御使いたち、（ ）つの燭台は（ ）つの教会である。

このように（ ）は、私たち教会をあらわす数です。ですからイエシュアからアダム、そして神へと至るこの系図は、「神の国」の民とはイスラエルと教会、正確には大患難時代を生き残ったイスラエルの残りの者たちと、携拳され、地上再臨のイエシュアに従って来る天の軍勢、聖徒たちによって構成され、そこから「神の国」が始まるということを表しているのです。

## 6. くだられること

イエシュアは王の王、主の主であり、やがてこの地上に再臨されます。それは携拳に始まり、私たち教会が天の軍勢、聖徒となるべく先によみがえり、天に引き上げられます。その時地上は獣、反キリストによる支配を受けます。サタンの申し子である彼の最大の目的は、自らを神、キリスト、メシアとすることです。その謀略をこの今の時代ごと終わらせ、新しい世をもたらすために神の御子メシア、イエシュアは来られます。そしてそのイエシュアのご支配とその御国は、永遠に終わることがありません。これが、これこそが、ただこれだけが福音であり、私たちが信じ、待ち望み、そして宣べ伝えなければならない事実です。私たちが今どういう状態、状況で、何をするとかしないとか、何を知ってるとか知らないとか、はっきり言って、そんなことどうでもいいのです、と言っても過言ではないほどにこの福音、神のご計画は重要です。今あなたが抱えている悩み、問題は、一体どれほどの期間のものでしょうか。せいぜいそれは数日、数か月、長くても数年程度でしょう。しかし神が今取り組んでおられる問題は、この宇宙の万象が創造され、そして人が最初に罪を犯した時から今日にまで及び、そしてこの世の終わりにまで続いていくものです。あなたの問題と、神のそれと、一体どちらが重要で、どちらに目をとめなければならないのか、言うまでもありません。しかもその神のご計画は、福音は、私たちのすべての悩み、苦しみ、問題をも軽々と飲み込み、それを完全に、そして永遠に解決してくださるものです。そもそも神を信じる教会が、その神の目指しておられるものを見ないとはどういうことでしょうか。ですからどうぞ「くだらない」ことではなく「くだられる」こと、イエシュアが降って来られることを祈り求めてください。「主イエシュアよ。来てください。」と。救いはただこの御方の、その来られることだけにあるのですから。